

応化会だより

昭和49年12月 第17号

早稲田応用化学会

1980年代の応用化学

加藤 忠 蔵

トランクに札束を詰めて買物に行ったという第1次大戦後のインフレ迄はいかないが、イタリヤの破産寸前の状態といい、イギリスのストライキ続発による経済危機といい、またアメリカでさえ昨年比去年に比べ物価が15%上昇したと騒いでいる。日本の政府は今年度の物価上昇を15%に抑えると公言しているが、誰も信用するものはいない。

石油の値段が1年前の5倍に上り、アラブ諸国には毎月100億ドルの外貨が流れ込んでいる。このままでゆくと1980年までに6000億ドルの外貨がたまるということだ。その一方でアフリカやインドでは食糧危機で何百万の人々が飢餓寸前の状態にある。アラブだけに金がたまってほかの国はインフレという怪物に食いつくされ、購買力がないから物をつくっても売れない、売れないから設備投資もしない、その結果品物が払底してまたインフレになるというジリ貧の繰り返しになる。1929年の大恐慌でアメリカでは株の値段が10分の1になったということを知ると、何とかしなければと政府も考え、一般庶民も何とかしてくれと待っている。何かがしのび寄っている。いやな予感がする。

歴史の大きな流れからいうと、20世紀になるまでは王様と人民の間の闘いと宗教・宗派間の争いが繰り返えされた。しかし革命という大きな犠牲と流血をへて王様と人民が仲良く暮らし、宗教宗派が違って共存できるような世の中になってきた。勿論まだアフリカの1部やアラブにこれらの争いの1部が残っているが、いずれ落つく所に落着くだろう。峠をこしたといえる。また20世紀に入ってからには戦争という大きい犠牲を払って植民地が解放された。これも1部に残っているが、大勢の行方は決ってしまっている。これから考えると1980年にしのびよるものが、王様と人民の争い、宗教・宗派間の争い、植民地解放とは思えない。

では1980年代の問題は……。労組だという人がある。確かに労組の力は巨大になり政治を動かす程になっている。各国政府とも労組をいかに政府の味方につけさせるかあるいは取り込んでしまうかに腐心している。これも支配階級から云えばそうであろうが、人民の方から云えば最大の味方である。政府も労組も金持も貧乏人をもこれから食いつぶしてしまう怪物はわれわれの身近かにある“物”であり“物価”である。人間と人間は共存できるようになった。しかし次に人間と物の共存が問題である。地球上の物は無尽蔵にあるのではないし、適正な使い方、効率ある利用法を図らねば、物によって人間がつぶされてしまうであろう。

既に人間と物との共存の問題が世界に先きがけて日本におきている。それは公害という厄介な怪物に変身して現われている。公害の発生源として応用化学は大分たかかれたが、公害の除去にない手も応用化学である。この怪物は徐々にではあるが解決されつ

つあり、人間と物の共存に光が見えつつある。1980年代になるまでに応用化学にたずさわる者の努力によってこの魔物は退治されてクリーンな生活環境に一步でも近づくであろう。

では1980年代の応用化学はどうあるべきであろうか。第2次大戦後は新製品、新技術で約20年間生長を続けてきたが、今は峠にさしかかっている。ここをのり越えなければ未来への新しい生長は切りひらかれないであろう。今までの新製品、新技術は旧製品、旧技術になりつつある。人類の豊かな未来を約束し、人間と物の共存できる1980年代を目指して応用化学にたずさわるものはどんな物に着目すべきであろうか。

まず今迄のようなスケールメリットを追うことは資源浪費を起こしかねないし、これからは質的な拡大に向うべきである。これからの応用化学の新技術、新製品の方向としては、

1. 人間の健康状態の改善と向上，食住生活および社会生活の高度化・効率化，環境汚染防止に密着した分野。
2. 資源不足や枯渇に対処した資源の有効利用を目指す分野。

を指向すべきであると思う。この表現ではいかにも抽象的であるので、これらに属するテーマで応用化学に関連するものを次に考えてみよう。

テレビ電話，テレビスクリーンなど直接電送に関係する材料，本格的情報化社会への移行に伴うミニコンピューターに関連する材料，石油・天然ガスに代るエネルギーとしての太陽電池とその材料，原子力による製鉄・非鉄金属の製練，石炭のガス化・液化のリバイバル開発，地熱エネルギーの利用，石油たんぱく，合成皮革，種々の機能性高分子材料，無機有機複合物による新材料，ライフサイエンスの主役になると思われる人工腎臓，アルミより軽く鉄より強い炭素センイ，海水の淡水化，公害関連としてはガス化脱硫技術，自動車排ガス規制技術など。これらの中には既に開発中のもの，一部成功しているものもあるが，夢ではなく企業化のできるものだけを思いつくままピックアップしてみた。

これからの時代は今のべてきた様に人間と物との共存の時代である。その物は人間に快適にしてクリーンな生活環境を与えるものでなければならない。しかもインフレなどという怪物に生長しない物でなければならない。そしてこれからの応用化学はただスケールメリットを追うより資的拡大を目指した物の生産を考えるべきであろう。

昭和49年9月より前主任の城塚正教授に代って応用化学科の学科主任に就任することになりました。前主任の敷いてこられたレールによって一生懸命，応用化学科と応用化学会の発展のため微力を尽したいと考えております。何卒御指導御鞭達をお願い申し上げます。この機会に応用化学の現状とこれからを紹介したいと思います。

現在応用化学科の学生定員は140名，うち工業化学コース100名，化学工学コース40名である。毎年卒業する学生は120名前後であるが，2年生のみは入学手続の関係で多

く現在約 180 名である。卒業生のうち毎年約 50 名が推薦入学で、さらに受験で 10 名位が大学院へ入学してくる。また 10 名位が他大学の大学院を受験し、残りの 50 名位が学部を卒業すると同時に就職している。就職は例年順調で求人会社は応化だけで毎年 800 社をこえる位である。特に大学院学生の約半数は奨学金をもらって就職予約済であり実際就職試験を受けるものは 20～30 名位である。そのため問題なく採用して頂く場合が殆んどである。学部の方も大体順調であるが、本年に限り色々の事情で未決定の者が数名いる。

学部の卒業に必要な単位は昭和 45 年より 146 単位になっている。この時の改訂で基礎科目を重視し工業化学の講義の多くが選択になった。また多人数教育をさけるため、2 年生に 10～15 人の小人数クラスを設けて先生との接触を多くしたことも特色の一つである。

大学院は応用化学専攻の中に無機化学、有機化学、物理化学、燃料化学、高分子化学、応用電気化学、応用生物化学、有機合成化学、化学工学の 9 専修が設置され 1 教授当り 1 学年 2～5 人位の大学院学生を指導しておられる。

応用化学科の将来に関しては早稲田大学 100 周年を 8 年後に控えて、諸先生諸先輩はじめ応化会会員の方々のお智恵を借りて計画してゆきたいと思っている。現在大学への進学率が全国で 32%、東京地区で 50% となり、大学の大量化と多様化が進んでいる。理工学部が今の様な多数教育を安易にとり続けると平均化された私立大学の中に埋没してしまつて忘れ去られてしまう恐れがある。先輩の築いた地盤を引き継ぎさらに発展させるためにはどうしても教育と研究の主体を大学院に移行させ内容を充実させることが重要である。しかし乍ら現在の設備や教員数は学部教育のため考えられたもので、大学院拡充の要請に答えていない。主要な国立大学が大学院大学としての形態を整えてゆきつつあるとき、われわれも当然大学院の拡充の方に目を向ける必要がある。

もう一つの問題点は研究室が狭隘で研究充実への最大のネックになっていることである。理工学部に設けられた将来計画委員会の答申の中にも高層の 51 号館（18 階建）の 8～10 階に化学系研究室のあることは災害の面からも重大であることを警告し、東側の 56 号館隣の運動場への移転を勧告している。百周年の 1982 年には装いも新たに教育、研究、設備の三拍手の揃った応用化学科にしたいものである。

応用化学会は棚橋会長、大友、鎮目、城塚の 3 副会長以下役員の方々の御努力により活動をつづけており、今春は応用化学会 10 周年を記念した記念号が発行され、記念の集りのなされたことは御存知のことである。それを契機に名手氏（昭 34 年卒）らの呼びかけで応化ヤングの会が生れ、9 月 25 日と 10 月 30 日に特別講演が学内で催され卒業生と学生との交流が深められている。この特別講演は来る 11 月 27 日にも行われる。

しかし乍ら応化会会員は現在約 4000 名に達し、昔の様な小人数でアトホームな集まりが中々開けなくなつてきている。年代別の会と総会を別に考えることも必要かも知れない。また会長以下役員ロードも大変なもので、同窓会として発展させるために会員諸士の名案をお待ちしている次第である。

（応化主任）

私立大助手を体験して

篠 崎 開

私は修士を卒業して1年間、私立大に就職し有機化学の研究室の助手をしていました。私達助手の仕事は主として研究室の研究と、学生実験をみることでした。その時に感じた興味ある点を紹介したいと思います。

学生実験に関してですが、これは3年までに総ての実験を終了しさらに、3年に専門実験が集中しています。専門実験についてみますと、3年を4つに分け、物化実験、分析(無機)実験、有機実験、生化実験とあります。実験は週3回で2時~5時で、それぞれ22回前後の回数になっています。この中で私は有機実験をみていた関係で、それを中心に述べます。

実験担当は先生1人、助手2人、大学院生2人の計4人で約70名の学生をみます。終了時間は5時ということになっていますが、実際は7時前後になってしまいます。実験の進め方の特徴は学生一人一人が実験し、実験を早く終えた学生は、他の学生とは関係なく次の実験へ進めるようになっている点です。実験が早く終わっても暇になるということがありません。実験内容に関しては、かなり系統的な実験があり、そのせいか学生も一所懸命実験するようでした。

簡単に実験項目を記しておきます。

- 1) n-ブチルブロマイドの合成,
- 2) アセトフェノンの合成,
- 3) z-フェニール-z-ヘキサノールの合成(グリニャール反応),
- 4) カルコンの合成,
- 5) シクロペンタジエンの合成及びディールスアルダー反応,
- 6) O-, P-ニトロフェノールの合成,
- 7) スルフェニルアミドの合成,
- 8) ルミノールの合成,
- 9) 6.6-ナイロンの合成

有機実験に関しては以上です。

その他の点でおもしろいと思ったのは、卒論及び修論の発表形式です。すなわち化学科の全学生、全教員を対象に学会発表と同様の形式で行うことです。他の多くの研究室の研究内容、研究方法、研究成果を知ることができ、自分達の研究にそれらを役立たせることができるという点だと思います。

私達応化の場合を考えますと、人数の多いこともあり、2~3の研究室単位に、ほぼ同時に発表を行なっています。そのために他の研究室の研究発表を聞きに行くこともできにくく、さらにそのようなムードもないように思います。

しかしながら大学院の修論、博士論文の発表会は全学生、全教員を対象に、だれもが自由に聞け、討論できる場にさせていただきたいと思います。

以上簡単ですが、興味ある点を紹介してみました。

(第20回博士過程2年)

私の卒論研究について

和 泉 儀 一

先日、高校時代の私の友人と久しぶりに会い、世間話に花を咲かせ、私の卒業論文に話題が移った時、彼は私に、「君の今やっているその卒業論文の研究は具体的には、どのように実社会に役立つのかな。」という質問をしました。彼は大学で経済を専攻していますから、そのような観点から、私の研究を理解しようとしたのでしょう。しかし、私は答えに困ってしまいました。そのような質問をされれば、「今のところ、何の役にも立たないだろうね。」と私は答えざるを得ないのです。私のやっている研究がまとめられ、化学的に非常に興味ある事実が、もし、発見されたとしても、それがただちに、化学工業に用いられたり、応用されたりして、直接的に我々の生活を豊かにすることは不会でしょう。なぜならば、私の研究はそうした観点到に基ずいたものではないからです。「では、どのような観点到に基ずいているのか。」と、当然質問されることと思います。これに対して私は「有機化学の広い意味での理解のため」と答えます。このような答えは我々のように、大学で化学を学んだものには理解されると思いますが、広い意味での一般の人々には、なかなか理解されにくいようです。「化学は、実社会に役立つ学問」と言う概念を人々は持っているからです。

「私の研究は、実社会には役立つないだろう。」と、もし私が言ったとすれば、物事を経済的に考える人は、「我々の実社会に役立つないことを研究しても意義がないのではないか。」とおっしゃるでしょう。このことを言い換えると（考えが飛躍しているかもしれませんが）「金儲けにならないことは、ビター文出さない。」と言うことになるのではないでしょうか。このことが、今の日本における、企業の研究に対する姿勢であると思います。このことは、企業ばかりではなく、我々日本の思考の根底には、このような考え方が深く根ざしていると思うのです。

「大学でやっている研究は、企業のそれと比較すると、あまりにも遅れていて、しかも役に立たないものが多い。」とよく耳にしますが、このように言われるのも、前述の観点到に基ずいているからでしょう。

事実、早稲田の応化の各研究室（それぞれ事情は異なっているとしても）においても、程度の差こそあれ、企業と比較すると、あまり実学的な研究はやっていないと思います（私の認識不足かもしれませんが）。それだからと言って、ただちに、大学の研究は無駄な事をやっていると言うのでは、あまりにも性急すぎるのではないのでしょうか。

大学の研究には、基礎研究と言うメリットもあるのです。おそらく世界の国々は、「日本は基礎研究の嫌いな国。」と言うイメージを持っていると思いますが、これからは、そのようなイメージはマイナスの意味しか持たなくなるのではないかと懸念しています。

今の日本は、研究に対する考え方を根本的に改める時期ではないでしょうか。ノーベル賞を受けられた江崎博士が来日した時、江崎博士の日本政府および経済界の研究姿勢に対する批判にはかなり厳しいものがあったと私は記憶しております。

たとえ、今すぐに、実社会に役立たないとしても、現状のような“いきあたりばったり”の研究ではなく、もっと、大局を見通すような基礎研究も、これからの日本には必要なのですから、このことを一般の人々に理解してもらうために、我々化学を学ぶ者はもっと積極的に、実社会に役立たない基礎研究の重要性をアピールすべきではないでしょうか。

実社会に役立つような研究は、一般の人々も関心をもち、正当に評価されるでしょう。しかし、その裏に隠された、それを導くまでの地味な基礎研究は忘れられがちなのです。

「ローマは一日にして成らず。」私はこの“ことば”の意味を、無駄の研究（実社会に役立たないと言う意味において）をやっている一人として、噛みしめたいと思う。

(4年)

随 想

森 康 郎

現代社会はそのあらゆる分野において、高速度の展開をみせている。なかでも、科学ことに自然科学における進歩には、目ざましいものがある。しかしながら、科学の進歩を根底的にとらえてみる時、はたして科学は「進歩」したのであろうかという疑念を、私は禁じ得ない。

確かに、今日の我々人間の生活が、科学に負うところは極めて大である。衣食住のすべてにわたって、科学が我々に与えている恩恵には、はかり知れないものがある。

しかし、科学の力によって、我々の生活がより豊かで合理的なものになったとして、それが即「進歩」といえるのであろうか。「進歩」とは、「物事がよい方に発展していくこと」と辞書にある。私は、ひとつ言葉の意味を云々するつもりはないが、その「よい方に」という点に、少なからぬ疑問を感じる。

現代の社会、我々の生活は、科学が「よい方に」発展してきたその結果としては、余りにも問題点をかかえこみすぎているように思われてならない。もちろん表裏は何事にもある。しかし、科学の発展によって、我々人間が得た利点を表面、また、逆に失点を裏面と考えてみると、それは単に何事にもあると思えずごしてしまうには、あまりにも重大である。今日、我々が科学によって得た利を至福として甘受するには、あまりにも科学の裏面は陰惨だ。科学の失点の数々をここで列挙するのは止めよう。それは、今日誰もが主観的あるいは客観的に察知していることだからである。今、人間は、自らの発展の道具であった科学の裏面にひきずられ、苦しめられている。人間が人間として生きることを、誰もが肯定しながらも、現実には公害病で肉体を奮われ、生命さえも抹消された

人間、そうでなくとも少なからず人間性を喪失せしめられた人間が横溢している。今日それについて言及する多くの人間がいる。また、それらの問題点を解消すべく、あらゆる対策も講じられてはいる。しかし、本当の解決はそこにはあるまい。たとえ、公害防止対策により公害が100%除去されたとしても、科学発展に伴う第二、第三の問題が提起されないという保証はない。公害は、多くの犠牲を払って、公害防止対策を生んだただそれだけのことである。このような、いわば応急処置では、時とともにまた、再発を待つばかりである。ここで、我々は、科学というものは根本的に考えてみる必要があるのではないだろうか。一例を挙げてみよう。例えば自動車というものについてみると、それは、年々、その台数が増加し、今や私達の足の一部である。しかも、それは、より速く快適にという方向に研究が進められている。また、利用する側も、さらに速く快適にと要求をエスカレートさせている。しかし、なぜ速くなければならないのか。歩いて1時間の道のりを、人が歩いていたときには、社会はすべてそのペースで動いていたはずだ。それが自動車によって、5分で行けるようになると、世の中の動きもそれに準じた。もし、さらに短時間でということになれば、同様に我々の生活はめまぐるしく変わるであろう。そこには、ニワトリとタマゴのような堂々めぐりこそあれ、何の進歩もない。科学の成果を余りにも無批判無制限に受け入れ、さらなる発展を求める人々があるばかりだ。自動車を無用のもの、徒歩こそなどというのではない。なぜ、自動車が必要なのか、なぜ、速くなければならないのか、なぜ、そんなに急ぐのか、という疑問を、少しでも胸にとめることがなぜできないのかと言いたいのだ。これは、簡単な例にすぎないが、全てに通じると思う。

人間はあまりにも科学の発展に対して刹那的でありすぎたのだ。今日より明日と考えるのは人間の本性である。しかし、そこには、熟慮に基づき方向性がなくてはならない。そして、その方向は、今までのような近視眼的な刹那的なものであっては決してならないはずだ。私達人間には歴史に基づいて過去を顧みる力もあるし、現在を見つめることにより、未来を予測する能力もある。それならば、まず科学はいったい進歩したのであるかと考えることにより、本来、人間として生きるべき方向性を回復し、さらには、真の科学の進歩を生み出す努力をしなければなるまい。

古来、考え抜かれてきた命題「人間とは何か」それに対しての明確な解答は未だ得られてはいないが、その解答の如何にかかわらず、我々人間は常にこの命題の上に生きねばならないはずだ。しかしながら、科学においてはどうか。科学の発展の目まぐるしさの内に、この命題は疎外され、忘れられているのではないか。「科学は哲学するのか」それを考えることが、真の科学の進歩につながるものであると私は考えるのである。

(4年)

ジャンボヤマベを追って

谷本俊八郎

長雨と台風の余波にたたられどおしの9月。海へ向かえば強風と高波で船にも乗れず、川に入れば増水の赤ニゴリ。行く先ざきで雨と風につきまといわれて、天候にフラれ、魚にフラれる。まさにさんざんな月であった。

それならば、多少の風にも、濁りも強いヤマベ釣りならどうかと、半ばヤケクそ気味に伊豆の狩野川に白羽の矢をたててみた。このヤマベは名にしおうイワシヤマベ、良型のヤマベには魅力があるし、ひょっとすると尺バヤにもお目に掛かれるかも……。というわけで車を走らせたのは、相変わらず空もようのあやしい日曜日だった。

アユ釣りファンに混じって

当日は私の所属する会のアユ供養をかねての納竿会が行なわれる日でもあった。シーズン中に釣られ、そして人間の腹のなかへ納められたアユをなぐさめようと川原に線香をたてて、会員有志をにわか住職に仕立てたすえ、全員合掌して念仏をとなえるという私たちの会に伝わるおごそかにして、こっけいな年中行事のひとつである。

会の人たちに合流すべく、集合場所の狩野川公園に着いたのが八時半。自宅を6時半にたったので、ちょうど二時間のドライブだ。公園の隣りに広い無料の駐車場があり、奥に茶店も開いている。待ち合わせ場所として、また茶店ではアユの時期には入漁券も取り扱っているから釣りにも便利で、ここへ車を置いて釣り場へはいるつり人も多い。この日も土手下の本流では、落ちアユをねらって友竿をだすつり人たちは、水温の低い早朝にもかかわらず、膝まで立ち込んでしきりにオトリを泳がせていた。

狩野川では友釣りのシーズンは長く、例年なら10月いっぱい楽しめることから、他川に見切りをつけた友釣りファンは遠方からもこの川を目がけて集まってくる。しかし、秋色ただよう川原でみかける友釣り風景も、盛夏のそれとはへだたりがある。何かしらうらびれた雰囲気を感じられるのは、ああこれで今年のアユも終わりなのか、という気持ちの底にあるからだろうか。午前中はアユ釣りに専念する会の人たちとは、昼の集合場所を打ち合わせてヤマベ釣りにいく。

修善寺附近に好場所あり

伊豆にはハヤ、ヤマベの多い川がいくつかある。そのひとつは下田に流れる稲生沢川であり、また松崎的那賀川でもあるが、それらは流域の長さ、釣り場の広さにおいて狩野川の比ではない。狩野川は本支流合わせて、どこでもハヤかヤマベが釣れる川だ。

しかし、どこでも釣れるとはいえ、あまり奥の方へは行ってしまつとヤマメも釣れて

しまうから、ヤマメの禁漁期を間近にひかえてつごうが悪い。(ヤマメの禁漁期間は10月1日から翌年2月末まで)。なるべく足場もよく、しかも溪相のよい中流部の修善寺周辺に焦点をしぼってみた。

このあたりでは、本流のほか桂川、大見川などの支流も近く、車で10分か20分くらい走らせれば自由に釣り場がかえられてつごうがいい。

狩野川に沿って走る国道136号は、修善寺橋の近くから右方へ大きくカーブして、しばらくの間山側にはいり、支流の桂川に平行して約1km、修善寺町の手前で桂川を渡って船原方面へと続く。桂川での釣りは修善寺温泉付近から下流がよさそうだ。

足場のよさそうな所をさがしながら、温泉場のなかをうろちょろしているうちに、橋の下手に小さなトロ瀬に続いて水深のある淵をみつけた。橋の上から水中をすかしてみると瀬尻の石のまわりいきなりと光る魚影がいくつか……。内心しめしめとほくそえむと、早速車の中から道具をとりだして仕掛け作り。

パンの耳がいい

狩野川流域でのヤマベ・ハヤ釣りには、エサ釣りでは、本流の大場所(淵)などをねらうならトウガラシウキ、瀬釣りでは玉ウキを1つか2つつけたウキ釣りが、ヤマメ用の目印をつけたミャク釣り仕掛け。

ここまでは他の川での釣りと同じだが、エサがちょっと変わっている。食パンの耳が意外と食いがいいのだ。これを小さくちぎってハリに刺して流せば、どんなに固いパンの耳でも適当に水分を含んで柔らかくなる。しかもこげ目のついた香気が魚の食欲をそそのかす、不思議なほどヤマベやハヤが飛びついてくるのだ。もちろん、水中の石についでいるチョロ虫や黒川虫でも釣れるが、食パンの耳で釣れるのなら手をぬらして川虫を探る必要もないし、まして、眼の色変えて他人よりよけいに釣ろうという気さえなければ、パンをかじりながらのんびりと釣りが楽しめるというものだ。

毛ばりの流し釣りももちろん可能だ。ただしこの釣りはアユのソ上期には禁止。私の釣り方はミャク釣り仕掛けにアユの毛バリを一本結んだ簡単なもの。川虫探りもおっくう。エサのつけかえも面倒。腰にピックをさげて歩いても魚を入れることもない、いたって無精なつり人に向いている釣りだ。

ゆかたがけの釣り場

この日は最初につけた毛バリの「お染め」が当たって、桂川では小さなヤマベがよく釣れた。ハリに返しが無いからチモトを持って軽く振ると、手で魚に触れる前に魚の方からはずれて水面へ落ちてくれる。

釣っては放しを繰り返していると、突然頭の上の方から「釣れますかァ」と黄色い声がかかった。見あげると対岸の護岸すれすれに建てられた旅館の手すりに身を乗りだし

ている女中さんの姿。泊まり客を送り出したあとで部屋の掃除をしていたのだろう、座敷簞を手にしている。「うん」といって頭をさげようとしたが、降りだした雨のしずくが帽子のひさしにたまって、いまにもこぼれ落ちそうなので、そのままの姿勢でウインクしてみせる。ところが敵はなんの反応も示さずにぶいっと部屋の奥へ消えてしまった。それもそのはず、こっちは濃い色のサングラスをしていたから、片目をつぶっても相手にわかるわけがない。「バカだなオレは——」。

しばらくするとその上の階から、ゆかた掛けの頭がひとつ、少し間をおいてひとつまたひとつとだんだん頭数が増えてくる。すべての視線がこちらを見下ろしているかと想像しただけでも気が散って釣りどころではない。こっちは潮時と大見川へ釣り場を移動。

ジャンボヤマベに見参

桂川に比べて大見川は川原も広く、本流の狩野川に劣らない水量を保っている。この川での大場所のひとつに、狩野川との合流点から500mぐらい上流の大淵がある。ここには右岸にゴミ焼き場、対岸の崖の上には大きな養豚場、どちらを向いてもクサイ場所だ。

大淵に続いて川幅の広いトロ場、いずれも大バヤや大型ヤマベの多いところだ。この淵尻でしばらくの間、いわゆるイワシヤマベの力強い引き味を堪能、12時をまわったので集合場所の日向神社へはせ参じる。

神社には間違いはないが、祭りや行事のあるとき以外は使われていないのだろうか、社殿の内部は全くのも抜けのから。勿論ご神体まで取り払われてあった。早々と川からあがった仲間たちが、境内の木陰に雨を除けてカマドを作り火を炊いている。

今日の献立は釜あげうどんだそう。今月の幹事であるそば屋のN君が本職の腕をふるい、大ナベでうどんをゆでてくれる。熱いうちにタレにつけて、雨にうたれて冷えきった胃の中へ流し込む。食べる人数が多いから板前さんはおおわらわだ。

からだは温まり、胃の中が満足すると2本の缶ビールがからだ中にまわって、神殿の板の間の上で長々とダウン。

眼がさめると前にも増してどしゃ降りの雨だった。

——おわり——

(雑誌「つり人」に掲載)

(新8回 日本フィッシングサービスK・K)

会 務 報 告

〔庶 務〕

役員会 49. 5. 24 私学会館 (pm 5: 30 ~ 8: 00)

棚橋会長の挨拶に引続き各委員より会務報告が行なわれた。とくに50周年記念事業の赤字の件は、会長より一任してはしいむね発言あり、了承された。

総 会 49. 5. 24 私学会館 (pm 5: 30 ~ 8: 00)

講演として大日本印刷(株)常務取締役、旧制26回卒 古関敬三氏の「1/1000 ミリに生きる」を拝聴したのち、山本先生の叙勲(勲三等旭日中綬章)を会員一同祝賀申し上げ会食に入った。当日出席は130名余を数え盛会であった。

公開講義

「応化会だより」第16号に掲載された名手氏提案の「応化会ヤングの会」を、学生及び若い卒業生を対象として応化会、教室共催の公開特別講義という形で理工学部大教室(時間は各回ともpm 3: 50から)で実施した。

第1回(49. 9. 25)「石油とその代替燃料」

公害資源研部長 燃料2回卒 坂 部 孜氏

第2回(49. 10. 30)「農薬の話」

日本化学工業(株)肥料部長代理 旧制31回卒 海 野 良 一氏

第3回(49. 12. 4)「ポリエチレンフォームの研究と開発」

古河電気工業(株)研究所長 旧制22回卒 細 田 喜六郎氏

各回とも卒業生10余名、学生200余名の参加を得、講演終了後卒業生と学生が懇談する機会をもうけた。なお今回の案内状は卒業10年以内で東京近郊在住、会費納入者に送付した。

学 位 取 得 者

工学博士 真田 莖 “積層型ポリカチオン重合体の合成と高電導性TCNQ塩への応用”

松田 五明 “ニッケルおよび銅の初期電析現象”

逢坂 哲弥 “水溶性高分子の界面挙動”

川瀬 義矩 “液及抽出機構とその応用に関する研究”

石渡 正博 “起泡分離法に関する化学工学的研究”

理学博士 古賀 義紀 “100 GHz帯誘電特性測定による分子構造の研究”

(会 計)

昭和48年度会計報告

収 支 決 算 表					
(自昭和48年4月1日)					
(至昭和49年3月31日)					
収 入			支 出		
費 目	金 額	予 算	費 目	金 額	予 算
前期繰越金	123,742	123,742	会 報 費	742,940	650,000
正会員会費	1,194,800	950,000	名簿費	652,838	700,000
有志会員会費	10,000		集 会 費	64,680	200,000
学生会員会費	310,500	270,000	学 生 部 会 費	40,000	70,000
諸 利 息	104,690	100,000	集 金 費	28,015	50,000
寄 付 金	31,000	0	支 部 費	40,000	40,000
雑 収 入	4,226	0	用 品 費	73,590	30,000
名簿積立金	200,000	700,000	事 務 費	190,000	250,000
50周年積立金	136,965	1,189,000	雑 費	12,646	20,000
			50周年 記 年 事 業	167,965	1,189,000
			次 期 繰 越 金	103,249	(予) 133,742
	2,115,923	3,332,742		2,115,923	3,332,742

※50周年記念事業は49年度で完了致しますので、寄付者芳名録および使途につきまして次号(18号)に掲載の予定です。

貸 借 対 照 表			
(昭和49年3月31日)			
借 方		貸 方	
費 目	金 額	費 目	金 額
現 金	8,735	前 納 会 費 積 立 金	578,400
郵 便 振 替 金	39,912	名 簿 刊 行 積 立 金	1,200,000
普 通 預 金	62,453	50 周 年 積 立 金	1,052,035
郵 貯 金	482,584	基 金	1,390,000
定 期 預 金	3,730,000	次 期 繰 越 金	103,249
	4,323,684		4,323,684

小林奨学基金利息収支決算表

(自昭和48年4月1日
至昭和49年3月31日)

収 入		支 出	
費 目	金 額	費 目	金 額
前期繰越金	389,496	教員研究費	280,000
貸付信託収益金	277,759	次期繰越金	396,226
普通預金利息	8,971		
	676,226		676,226

基金(貸付信託)総額 397 万円 (小林基金 274 万円, 水野氏 123 万円)
使用済利息 255.5 万円

昭和49年度予算表

収 入		支 出	
費 目	金 額	費 目	金 額
前期繰越金	103,249	会報費	550,000
正有志会費	980,000	集学生会費	150,000
学生会費	280,000	学 生 部 会 費	100,000
諸利	100,000	集 金 部 費	50,000
50周年積立金	1,052,035	支 用 部 費	40,000
		事 務 品 費	30,000
		雜 費	250,000
		50周年事業費	20,000
		名簿積立金	1,052,035
		予 備 費	170,000
	2,515,284		103,249
			2,515,284

会員訃報

下記の諸氏の御逝去の報を受けました。

謹んで哀悼の意を表します。

井上 勇氏

早稲田大学理工学部資源工学科教授，同大学評議員並商議員。急性肺炎の為
11月20日6時45分死去。享年58才。

肝付兼英氏

早稲田大学商議員，元当応用化学会会長。結腸ガンの為，11月22日21時32
分死去。享年81才。

編集後記

◇応化会だよりの編集を引き受けた時は，何か面白い企画でもと思いめぐらしていたのに，印刷の期限が迫るとそれに間に合せるのがやっとなで，原稿を依頼し，書いて戴くのに大変苦勞しました。

◇化学とは関係ない分野で活躍されている会員の原稿を毎回載せたいと思い，今回は釣のサービス会社を経営されている谷本俊八郎氏にお願いしました。（岸本孝夫）

◇世の中が忙しくなったせいか，原稿執筆を引受けて下さる方を探すのが編集幹事の一番大きな仕事になっています。今回から岸本孝夫君（新13回，早大理工学部工業化学実験室）に編集幹事に加わってもらい，今回は企画から執筆者選定，原稿依頼などすべて同君がやってくれました。同君，および原稿をお寄せ下さった諸氏に深謝します。

◇編集幹事追加については教室会議の了承を得たのみですが，次回の役員会でお認め頂くようお願いする積りです。（佐藤 匡）

昭和49年12月 発行

発行	早稲田応用化学会 新宿区西大久保4 早大理工学部内
編集兼 発行人	佐藤 匡 岸本 孝夫
印刷	蠶堀越研究所 千代田区神田神保町2-20